1991年3月1日発行　（財）高知市文化振興事業団

# 文化高知 40

## 酒の祈り

竹村維早夫

土佐は酒国――とよく言われる。紀貫之の『土佐日記』にも、つぎのような文章がある。

酒に酔って「一文字だに知らぬ童（わらべ）まで、足を十字にふんで字を書く」と。千年昔の先祖までこの有様である。

現代の土佐人にも、その歴史と伝統は受け継がれ、都道府県別の酒類消費量では、東京、大阪についで第三位。しかし、東京、大阪は大消費地であるため、別格と考えられるので、実力は日本一ということである。

このことは、酒造業にたずさわる一人として、大いに県民に感謝すべきことである。

しかし、先日の高知新聞の記事を見て、ギョッとした。

「殺人発生率、本県、三年ぶりに二位」――ということは、過去二年間は、全国一位であったこととなる。本年は沖縄で暴力団抗争があり、たまたま抜かれたに過ぎない。

記事の内容を読んで、さらに驚いたのは、「本県の殺人事件は相変わらず酒を飲むなどした際、カッとなって見境いがなくなり、犯行に至るケースが多い」というのである。

あの世　この世　いつの世　　矢部節子

ここでいう「酒」とは何だろう。一番消費量の多いビールだろうか、ウイスキーかな。日本酒は何％ぐらいあるのかな、等と考えて見たが、このような場合、「酒」というと、日本酒を連想する人が多いのが通例であることから、日本酒のイメージ・ダウンになる事は間違いないことである。

昔から酒は「百薬の長」と言われ、又、一方では「気違い水」とも言われて来た。その害の方だけを、このように見せつけられると、一日じゅう憂鬱になってしまう。

長い歴史の中、酒屋は地場産業として、又、地方文化の担い手として、歴史と伝統を受け継いで来た筈である。その誇りも、前述のようなワースト記録を見せられると、「酒は泣いている」としか言えないのが残念である。

今、酒造の最盛期。白壁の酒蔵の中では、馥郁たる香りが満ちあふれ、杜氏をはじめ、庫人達の熱気が伝わってくる。

人の世の、喜びを讃え、哀しみをいやす酒――そんな願いをこめた酒造りが、今日もつづいている。

（司牡丹酒造株式会社取締役社長）

# 本の中の青春

## 大森　望

〝翻訳家〟というと、資料に埋もれた書斎にこもり、日がな一日、原書と格闘している――そんなイメージが強いのではないかと思うけれど、ぼくの場合、サラリーマン編集者との二足のワラジを履いていることもあって、外で仕事をすることのほうが圧倒的に多い。重量二キロのノートワープロと優秀な中型辞書をショルダーバッグに放り込んで外出、ちょっとでも時間があくと、喫茶店にはいってキーボードをたたきはじめる。ダイナブックの登場以降、ブックパソコンを持つ勤め人が激増したこともあって、最近は奇異の目で見られることも少ない。適度の雑音が快適な作業環境をつくりだし、じっさい、自宅でやるより能率が上がる。

こういう習慣がどうしてついたのか、つらつら考えてみると、どうやら高校時代の受験勉強にさかのぼる。朝から晩まで部屋の中に閉じこもって参考書や問題集と格闘するのがいやさに、休みの日は高知市民図書館や県立図書館の閲覧室にいそいそ出かけていった。受験勉強の詰め込みに飽きると、開架の書棚をめぐって息抜きできるメリットもある。

物心つく前から家の中に本があふれていたせいか、大量の本に囲まれているときがいちばん落ち着く。だから、図書館に入り浸るのは小学校時代からの習性で、まだ木造だった旧館の子ども室以来、市民図書館にはずいぶんお世話になっている（ぼくはSF評論家の看板も掲げているのだが、SF読者としての基礎体力は、もっぱら小中学時代にむさぼり読んだ市民図書館の蔵書によって支えられているといっても過言ではない）。

徒歩五分の距離の県立図書館と市民図書館をその日の気分によって使い分けたり、はしごをしたり、いま考えてみると、飽きっぽい受験生にとっては理想的な環境だったと思う。

長い夏休み、毎日毎日の図書館通いに飽きてくると、今度は気分転換に喫茶店へと足が向くようになり、現在の喫茶店翻訳家への足がかりが築かれるわけだが、この点でも、高知市の環境はじつに整備されている。なにしろ、喫茶店の数が多い。犬も歩けば喫茶店にぶつかる帯屋町周辺はもちろん、こんな場所で客がはいるんだろうかと思うようなところにもちゃんと喫茶店が店を構えていて、高校時代は毎日のように新しい店を開拓していた。数はともかく、喫茶店の密度に関しては、いま住んでいる東京より、高知のほうがよほど高いのではないか。

筆者が遊んだ昭和40年頃の鏡川河畔

毎年正月、高知にもどってくると、新しくできた知らない喫茶店にはいってみるのだが、東京ふうの洒落たインテリアの店でも、ちゃんと湯呑みにはいった日本茶が出てきて、ああ、高知にいるんだな、と実感する。その一方で、小学校のころから知っている店もほとんどつぶれずに残っていて、しばしなつかしさに浸ることができる。喫茶店の数は文化のバロメーターであると信じている喫茶店翻訳者の目から見れば、高知は日本有数の文化都市にほかならないのである。

（翻訳家・SF評論家）



# がんばってます！

## 物部川・遊・裕・共和国

### 日和佐干城

「もうまあ、準備を始めゆうかえ。」

四年前くらいから秋の収穫が終わろうとしている頃、私たち香北町の青年団がよく聞く一言です。

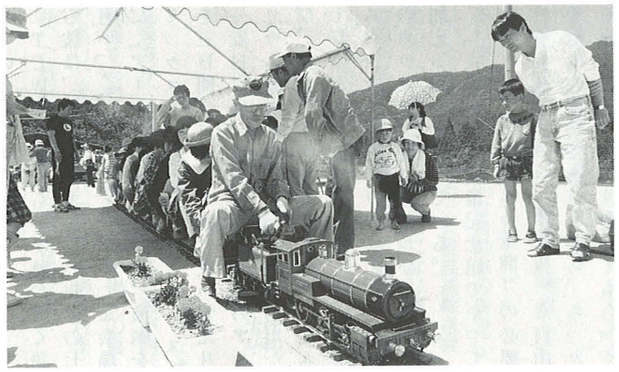
何の準備のことだろうと思う人々がほとんどと思います。これは、香北町で毎年春に町民一体となって行われている「物部川・遊・裕・共和国」のことです。この催しについてお話ししたいと思います。

そもそもこれが始まったきっかけというのは、ある時、青年団の一部の団員とその他の有志が何人か集まって、皆で楽しめて町が潤うことができないだろうかと考え、町を通り過ぎる人々をとどめようと知恵を出し合って生まれたのがこの「物部川・遊・裕・共和国」でした。

これは、町の真ん中をゆうゆうと流れる物部川を柱に「自然と人々の調和」をテーマとして、春の日差しと新緑の中で、日頃疲れた心と体をリフレッシュしていただこうというものです。

第一回は、プロフェッショナルステージを中心に二十四時間耐久ソフトボールなどを行い、大いに盛り上がりました。二回目は、プロによるコンサートや二十四時間ソフトボールの他、ミニ動物園、竹や木を使って手作りの遊具を作る「昔の遊び教室」など、手作りのイベントが加わりました。

その頃から「ただ漠然とお客さんを集めて盛り上がるだけではいけない。他の人々といっしょになって我々自身も頑張ろう。」ということで農協や婦人会、その他いろんなグループの人々が一丸となって進むようになりました。第三回では「ふんわりのんびりゆうゆう気分」と題して熱気球をメインに内容も一段と充実してきました。



しかし、いつも良い条件ではありませんでした。いろんな問題も生じました。本番では雨にも見舞われました。それでも、皆の努力と協力のお蔭で大成功を収めて来ました。

第四回では、六千人もの入場者を迎えるほどになり、香北町では最も大きなイベントとなりました。この年には、新潟県から二日にわたって十一トントラック二台分の雪を持って来たり、菜の花で作った迷路や、ミニSLを走らせたりして盛り上がりました。

このイベントは、五百円玉一枚で入場でき、その時もらえるパスポートを持っていれば、二日間出入りが自由で、大人も子供も楽しめる素晴らしいものだと思っています。

イベントが終わる頃、青年団員の中には肩をたたき合って喜ぶ者、また、あふれる涙を拭う者もいます。

毎年、いろんな工夫を凝らしてきたこのイベントも、五回目になり、一つの節目に差し掛かっています。これからは、「手作り」とか「自然との調和」というところは失わないようにし、さらに斬新なイメージづくり、魅力づくりに取り組んでいきたいと思っています。

もっともっと沢山の人々に香北町へ来てもらって、少しでもこの町を知って欲しいと願って頑張っていきたいと思います。

（香美郡香北町青年団長）

# 抬頭する若者文化 下

## 新しいプロデューサー プランナーをめざす若者

前回は、『ミュージカルRYOMA』が契機となって新しく誕生した「劇団ぶんぶんぶん」「劇団ファイト」の二つの劇団を紹介した。

今回紹介するのは劇団ではない。

高知市内で、自営業を営む傍ら、『世界最高コミュニケーション都市宣言・TCW（TOSA COMM UNICATION WAVE）』ならびに『演劇総合研究所〔etoile〕』を主宰し、新しい時代のプロデューサー、プランナーをめざす一人の青年、寺沢悦治君だ。

彼も、高校時代「劇団ゆまにて」での芝居体験から演劇の魅力に取りつかれ、高校卒業と同時に上京、二年間を勉学の傍ら演劇に熱中した一人だ。東京在住の一九八八年三月、演劇総合研究所を設立し、高校時代の演劇仲間とともに地元高知での実験劇を企画、高知市追手筋のギャラリー・パンで四日間にわたって「仙人掌SABOTEN」を公演、その制作・演出を手がけている。

「昨年三月、家業を継ぐ関係で高知に戻ってきた。高知を楽しく、面白くするためにいろんなことをやろうと、目下いろいろと勉強中。

高知には潜在的におもしろい人がたくさんいると思う。ただ、そうした人々が活躍する場がないだけじゃないか。自分で何かをやりたい。そんな人を探してきて、新しい場をつくりたい。

新劇だけが演劇じゃない。劇団にしてしまうとどうしても、集団としてのカラーが出来てしまう。そうするとその枠からなかなか抜けられない。

今は個性の時代、多様化の時代。個人のグレードを最大限に発揮し、お客さんに喜んでもらう、そんな演技者を集め、いろんな形式で作品化していきたい。未来永劫、寄せては返す波、最高に調和した波、世界最高のコミュニケーションの場をめざしていきたい。」

TCW設立のねらいを熱っぽく語る彼は、帰高してまもない昨年の七月、「メフィストフェレス」を会場に『アートとミュージック、演劇をミックスした総合パフォーマンス』を三日間プロデュース。次いで九月一五日には、自由民権記念館のアトリウム空間を会場に、『龍馬ふたたび、黄金マイクを握りしめ』（ミュージカルRYOMA主演・尾崎幸夫スペシャル）をプロデュース、現在のカラオケ文化にちょっぴり風刺を加える試みを行っている。

「実際に自由民権記念館でやってみて、〈自由に使える空間〉の必要性を痛感した。〝自由民権〟と自由を冠した建物でありながら、ちっとも自由じゃない。使わせてもらって文句をいうのはどうかと思うけれども、いろんな制約がありすぎて、非常に使いにくい。博物館という性格上、止むを得ないかもしれないけれど、他に場がないから仕方ない。

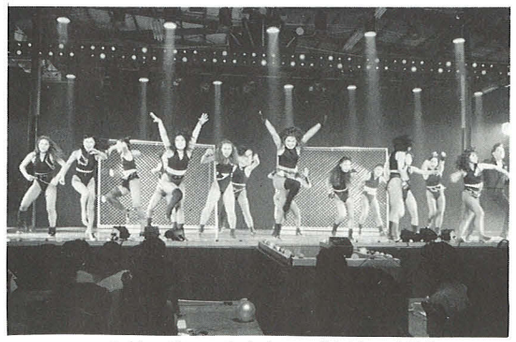
今、一番望みたいことは〈自由に使える練習場〉〈発表の場を兼ねたマルチの空間〉がぜひ欲しい。とにかく今の高知にはなにをするにしても、若者向きの場がなさすぎる。」という彼が今取り組んでいるのは、『ふるさと芸能紀行'91』のプロデュース。土佐落語と創作三味線にそれぞれの地域特有の文化遺産を組み合わせ、出演者と観客の交流の場を持ちながら、県内各地を巡回していこうという『土佐道中膝栗毛』の企画だ。

彼がいうように、今、市内で何かをやろうとする人は、その「活動の場探し」に多大のエネルギーを費やしている。

昨年六月、高須ハウジングパーク内の倉庫を会場に、高知発のオリジナルミュージカル『女達は詐欺師〜だまされたいの〜』を六ステージ公演した国友須賀さんは、

「…ブロードウエイには四〇以上の劇場があり、オフブロードウエイ、オフオフブロードウエイを合わせると数え切れないほどの小屋がひしめきあっているというのにわが高知の劇場の乏しいこと。

劇場ができるの待つわけにもいかず、思い余った私達はロフトを劇場に変身させることを思い立ちました。その空間をいかに使うことができるか、それも一つの挑戦です…」と語っているし、「薫的座」（薫的神社）の公演でよく知られる「演劇センター'90」は、昨年八月、高知市長浜の「カネシメファクトリー（元、蘭草の工場）」で『愛しのメディア』を上演。四十坪のにわかづくりの特設劇場に三〇〇人余の観客を集めている。


ハウジングパーク倉庫での『女達は詐欺師』

カネシメファクトリーでの『愛しのメディア』

これらが、「新しい試み」「実験的公演」というレベルでとらえられるのであればけっこうであるが、ほかに場がないための切羽詰まった状態の中での選択だとすれば、事情はずいぶんと違ってくる。既存の劇場やホールでなく、民間の倉庫等を借用しての公演となれば、当然常時というわけには行かないし、定期にという保証もない。日頃の練習の成果を発表する、その発表の場にも異変が起きているのである。

前述の自由民権記念館にしても、他にないからしかたなく目的外のイベントがもたれていると言った方が、より正しいだろう。

昨年十二月には、高知で頑張っている若いダンサーと、クラシックバレエを愛する人達が集まり、舞台を創造する新しいグループ「KOCHIバレエファクトリー」が結成され『クリスマスバレエファンタジー』の公演ももたれたし、地元のオーケストラとバレエが共演するという試みももたれている。

確かに今、高知の若者の間に、いままでの高知になかった活動、新しい文化を創造しようという動きが起きていることは事実である。この変化を大きなうねりにすることができるかどうか、そのことが問われている。

今、高知では、豊かな県土づくりのため、官民あげて国民休暇県構想の一層の推進に、また、道路・港湾・空港・文化施設等の社会資本の充実や工場誘致を初めとする産業振興等々、二十一世紀の成熟社会に向けての大小様々な施策の実現に取り組んでおられます。

文化的で快適な生活環境づくりとは、所詮、県民福祉の向上であり、県民一人ひとりの所得を上げ、生活水準のレベルアップに繋げようとするものであります。

そのためには、県内の産業、経済、文化など各分野の活動がスムーズに流れる必要がありますが、限られた国家財政の下では、県民の皆さんは、良く知恵を絞って、重点的な社会投資をすべきではないでしょうか。

道路整備が如何に大切かは、明治十年代、土佐の産業や文化の発展に大きく貢献し、「道路知事」の異名までとられた田辺知事さんの後世の評価を見れば分かります。

高知県にも戦前戦後を通じて鉄道の時代もありましたが、機能的な自動車の普及により、今日では、むしろ、大量高速輸送機関としての役割を荷なうようになりました。

中内知事さんを先頭にした大奮闘で、横断高速道が、来年といわず年内にも瀬戸内へ開通する勢いで、本県にとって世紀の喜びであり、大きなインパクトが予想されますが、これだけでほっとはできません。

都会から多くの観光客を迎え入れ、また、就業の場としての工場誘致を推進するには、高速道路網の県内での建設に全力を注がねばなりません。

県民の理解を得て、他県に遅れをとらないよう、安芸市へ、須崎市へと東に西に高速道路を早急に延ばさねばなりません。

明治維新に「土佐」が輝いたように、二十一世紀には、四万十で代表される自然と人工が見事に調和した、個性豊かな「高知」がきらっと光って欲しいものです。

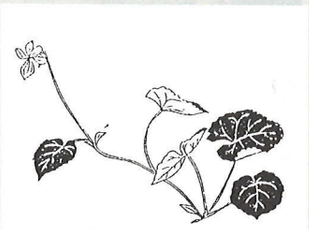
## 郷土の発展を願う

松崎正雄

（名古屋高知県人会副会長）

# 海鳴り（一）

堀内　豊



あることを調べる必要があって、平尾道雄氏の『土佐藩郷士記録』に目をとおしているうち、巻末の『断絶郷士録』に興味を感じた。

罪科を犯した郷士百二十七名の、処罰の理由と姓名が列記されて、そのなかに次の五名が、仁淀川以西へ追放されたとある。

高原茂右衛門　本川木材流に不届あり
溝淵　曾平　里改田領知に於て里人迷惑のことあり
徳弘　儀蔵　自宅に稽古所を設け不法の事あり
岡田孫左衛門　暮方宣しからず
小川茂左衛門　職務不正

書き写しているうち、ふと思った。もしかしたら、全員といわないまでも、一人か二人は、高岡郡宇佐村（現・土佐市宇佐町）へ流謫されたのではなかろうか、と。

なぜなら、藩政時代に、知名度の高い数名の人物が、宇佐村へ流謫されているからである。すなわち―。

『萬日記』の桂井素庵、『宮地家三代日記』の初代・宮地静軒、野中兼山の側近、淡輪四郎兵衛たちである。

このうち淡輪四郎兵衛の墓碑だけが、現在、宇佐町瀧ケ谷の山際に残っている。高サ約一メートル・幅約三十五センチの御影石に法名春月照光・淡輪四郎兵衛重信墓・行年七十二と刻されている。

彼は、元和九年（一六二三）高岡郡宇佐浦で生まれた。

『祖父四郎兵衛と申す者は、天正の頃居城淡輪にて討死』と孫の四郎兵衛はみずから〔上申書〕〔坂邑雑纂〕に誌しているように、祖父・四郎兵衛は天正一三年（一五八五）、豊臣秀吉の麾下の軍に敗れて、和泉国（大阪府）の淡輪城で討死したので、一族ことごとく淡輪から退去した。

そのとき幼少の父・淡輪九右衛門は、以後転々と諸方を流浪して、慶長の末年（一六一〇年頃）に讃岐（香川県）から伝手を求めて土佐に来国した。

ほどなく、土佐藩船手支配・真鍋善右衛門の口添えで、宇佐浦で船手役（水主）になった。元和七年（一六二一）のことである。

四郎兵衛が七歳になった寛永七年（一六三〇）に、父・九右衛門は病没した。

四郎兵衛の母は宇佐浦の出であったそうだから、たぶん母の縁者の庇護をうけて成育しただろう。

明け暮れ潮気のにおいにつつまれて成長した四郎兵衛は、しだいに海へのあこがれを持つようになると、亡父の意志を継いで、藩船の船手役を志願した。

やがて、四郎兵衛の雅量と才覚を認めた上司の推輓で、慶安元年（一六四八）に、若冠二五歳で郷士に取り立てられた。

そして、慶安三年に早くも郷里の宇佐浦奉行に任ぜられ、さらに承応元年（一六五二）に浦戸奉行。次いで明暦元年（一六五五）に宇佐と浦戸の両奉行を兼ねて柏島奉行に就き、翌年、ついに西半國（西浦）惣（総）浦奉行に栄進した。

四郎兵衛の並々ならぬ器量を、執政・野中兼山は高く買って、万治元年（一六五八）に郷士を四組に編成するとき、野村甚兵衛、弘井与大夫・下村弥兵衛とともに組頭に任命されて、組員二百人を統率することになった。

そして……。

野中兼山の失脚による政変（寛文の改替）のなかで、四郎兵衛は屋敷領知の召上げを覚悟していたが、事無きを得て、寛文三年（一六六四）の春、四一歳ではじめて土佐を離れて江戸で過ごすことになる。江戸詰の奉行として――。

帰国後、四郎兵衛は士格に昇進し、知行二百十石の土佐国総浦奉行として、浦々の支配を委ねられたが……。

まこと、晩年の四郎兵衛は悲運の人といおうか、延宝三年（一六七五）・下僚の永野、北代、茨野、島村、浜田、吉村、池知、浜田某が、御城銀（藩の公金）御城米（藩倉に納まった年貢米等の藩有米）を流用したことが露見して、全員が死罪に処せられ、四郎平衛もまた〔職務上監督不行届〕の廉で、知行屋敷を召上げられることになる。

翌年の春、四郎兵衛は、宇佐浦に帰郷して、長い隠栖生活を送って死没したが、彼が浦奉行を勤めた二十五年のあいだに『沖島地堺論』『篠山国境論定』を編纂し、全十一巻に及ぶ『淡輪記』を記述している。

その『淡輪記』が、昭和四十年（一九六五）に、高知県文教協会から刊行された「野中兼山関係文書」に〔淡輪記抜粋〕〔萬覚並状之跡書共〕として収載された。

それで初めて私は、四郎兵衛が書いたものを繙読して、ある事件の片鱗を知った。

それを四郎兵衛は次のように記している。

明暦二年（一六五六）二月二七日
一、同日丑の刻（午前二時頃）に渭之浜庄屋十衛門主家に火をつけせかれ（倅）所兵衛をねくび（寝首）かき則じがい（自害）仕候娘聞合さへにかかり候を手をお、せ申候は手二ケ所にて候へ共うす手にて候
一、同日申の下刻（午後五時過ぎ）に宮地治右衛門高知より被参候に右注進□□被仰下候様横目遣に不及候間様子吟味仕書付候へと□□に付酉の刻（午後六時過ぎ）十衛門父子土そう（葬）に取置せ候事。
同年三月十三日
一、伊（渭）之浜庄屋福嶋次左衛門に被仰付候へは次左衛門理申様は御城銀御城米銀合三貫九百卅五匁御座候其上はや飯米にはたとさしつみ又二帳之繕銀弐貫目余も入申候伊之浜之儀は十衛門御城銀引越故じがいに□当時之かりかへも不罷成候―略。

前文を判読すると、宇佐村渭之浜の庄屋・十衛門が、御城銀、御城米を合せて銀三貫九百三十五匁（今の約六六〇万円に相当）を藩へ納入する目処がたたず、加えて浦びとたちは飯米も乏しくなり、それに網を修繕する代価銀二貫目あまり必要としたが、それの工面もつかず、ついに進退きわまって事件をひき起こしたことを淡々と記している。

が、四郎兵衛は、十衛門が藩の公金を何に使ったか、一時の借用だったか、そのあたりのことを明記していない。

詳細の報告を、宮地治右衛門、あるいは宇佐村福島分一役所の下僚から受けていたとおもうが、あえて詳述を避けたであろうか。

それは、四郎兵衛が同郷人のよしみで、十兵衛を庇って、そこまで書く必要はないと判断したからか……。

では十兵衛は、城米、城銀を私利私欲のために費消したのか、さもなくば義侠心から独断で浦びとに用立てたのか……。

そのあたりの事情を考えると、脳裡に浮かぶのは、安芸郡羽根村の分一奉行・岡村十兵衛のことである。

彼は、十衛門が自害した年から二十八年後の貞享元年七月十九日（一六八四）に自殺した。その理由は……。

そのころ羽根村は、飢饉と不漁に見舞われて、村びとたちの多くが餓死するという、最悪の事態にあった。

十兵衛は、わが身を棄てて村びとを救済しようと決意して、独断で藩倉（年貢米収納庫）を開き、窮民に米を施して餓死から救った。

その責任をとって、数日のちに役宅で自裁して果てたのである。

この岡村十兵衛の故事が、なんとなく庄屋・十衛門の所業と重なり合って、私の鈍麻な神経をいたく刺激する……。

で、まず、宇佐村渭之浜が当時どんなところであったか、つまり土地柄と住民のことなどを、気まぐれな好奇心で探ってみたい。

慶安年中（一六五〇頃）に〔新浦〕として開拓された土地が渭之浜である。

新浦は、たとえば農村における新田村と等しいわけで、土佐藩の執政・野中兼山が、藩の財政基盤をかためるために強行した施策によって、新しくできた浦である。

それまでの渭之浜は、今の横波三里の入江、といっても大半は砂州であったが、宇佐村西北部の山手にある福島岡と渭之浜の住民が、開拓するにはもってこいの場所だということで、新浦をつくったそうである。

それについて、安永七年（一七七八）に谷真潮が誌した『西浦廻見日記』によると

『渭之浜は小埼が家を出て名（苗）字をかへた沢六郎右衛門と云いしもの開きし也』

とあるが、これはたぶんに谷真潮が、宇佐・福島両浦を巡察した折りに、土地の人から仄聞したことを記したとおもうが、いずれにしても、福島岡、渭之浜の有力者が、藩から開拓の許可を得て〔新浦〕をつくった。

この場合、事によっては藩から城銀、城米を借用する便宜を与えられ、それに、藩は産業振興の見地から、といっても、それは貢税の増徴を考えてのことだが……年限を決めて、年貢その他を減免することになっていた。

だが、たいていの新浦、新田は、初期にかなりの物入りが要るわりに、収入はあまり期待もてないというのが通例であって、渭之浜もご多聞にもれず、さまざまな悩みをかかえて〔新浦〕を発足さしたことが容易に想像できる。

（高知県職業安定審議会委員）

## 叛逆の心意気

# 土佐特別大歌舞伎

千光士 義幸

歌舞伎と聞くと、何か難しいもののように思われる方が、よくいるのではないですか。

いや、決して歌舞伎はそんな難しいものなんかではありません。

皆様、ご存じのとおり、歌舞伎は江戸時代初期に出雲の阿国によって始められ、当時の民衆の精神や思想が力強く脈打つ大衆の演劇だったんです。それを現在では、何か異質の文化でもあるかのように考えられがちですが、「伝統芸能」という近寄りがたく、遠い存在のものでもあるかのような言葉を乗り越えれば、私たちの演劇として、当時の民衆の思いが今でも息づく身近なものとして感じられるのではないでしょうか。

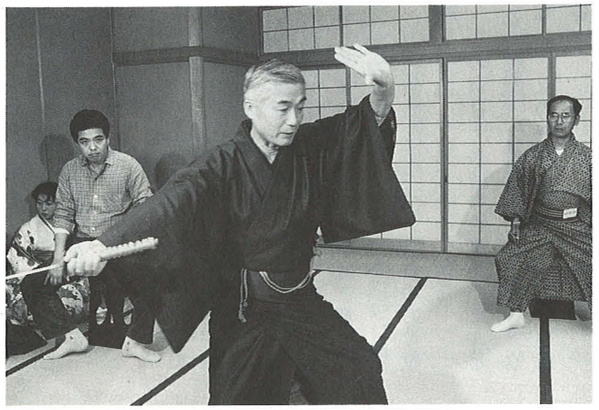
かつて、高知は歌舞伎王国と呼ばれるほど盛んに舞台が繰り広げられ、市内数カ所に芝居小屋があったようです。さらに高知の一座は、西日本一円、遠くは満洲まで巡業に回るほどであったと聴いています。

でも、現在では一部地域を除いては、中央からやって来る公演を観るのみの受け身でしかなくなってきています。

私たちは、そんな受け身の文化に甘んずることなく、今一度この歌舞伎を大衆のものとして、発展・継承することはできないか。

いや、いや、そんな堅苦しい言葉の表現ではなく「私たちの演劇」という、もっと身近なものとして「自分たちの手でやってやろうじゃないか」との意気込みを持ち、今年四月に「土佐特別大歌舞伎」と銘打って「太功記十段目」と「忠臣蔵五・六段目」の公演成功を目指しています。

「土佐特別大歌舞伎」は、一般公募による方々が、それぞれの歌舞伎に寄せる思いを胸に集まっています。当初、その思いは「お姫様をやってみたい」とか、「本当に私たちで歌舞伎がやれるんですね」という半分期待に胸ふくらませたものでした。



一段と熱の入る「太功記」の練習

今、出演者は、厳しい稽古を積み重ねるに従って、役を演ずることの難しさを痛感し、不安が胸を過ぎる日もあることは言うまでもありません。もちろん、その道は遠く、一筋縄でいくものでないことは知っています。歌舞伎の最大の魅力は様式美、「色彩・声・動作」の綾なす表現美といわれているようですが、この最大の魅力が私たちにとっては最大の難関となるでしょう。

しかし、出演者一同は、太功記で春長（信長）を討った光秀となり、「やってやろうじゃないか」という叛逆の精神とも言える心意気でぶち当たって、立ちはだかる春長（難関）を討ち取ってくれん……！

そして天下をとれなかった光秀に変わり、この謀反に勝どきを上げ、美酒に酔いしれる日が来るものと日夜稽古に励んでいます。

さあ、皆さんも「観るだけの文化」から「自分たちで攻め、創りだす文化」を求めようではないですか。今までとは、一味も二味も違った魅力に取り憑かれ、胸のどこかに新たな鼓動が脈打ちはじめることでしょう。

「土佐特別大歌舞伎」に乞うご期待！

（高知市社会教育課文化祭担当）



土佐の芸能10選 ⑤

# 緊張と笑いとの古式豊かな技（わざくら）競べ

## ——安芸郡北川村弓祭り——

高木 啓夫

いつぞや県立図書館の広谷喜十郎氏から「土佐三大祭りについてよく聞かれるが、それはどことどこか」と聞かれたことがある。古い記述を読んでいても「いと賑々しきことなり」とはあるが、それが三大祭りの一つであると記したものにはまだ及んでない。まして今となってその賑々しことの内容を知ることも不可能である。従って今みられる祭りの中から三大祭りを決めねばならぬが、自称三大祭りが三つどころではない。祭りの内容・規模から優劣つけ難いものが、やはり三大まつりと自称しているのである。そこで「自称三大祭りが土佐の三大祭りですよ」と答えておいたことがある。

しかし、弓の神事にまつわる祭りは、わたしは『土佐の芸能』で土佐三大弓神事を規定しておいた。香美郡夜須町の百手（ももて）祭、長岡郡大豊町桃原の百手、それに安芸郡北川村弓祭りである。夜須と北川の祭りはつとに知られていたが、山奥深くひっそりと行われていた桃原の百手は、わたしが弓神事三大祭りの一つと規定してから知られるようになったものである。しかし、中でも北川の弓祭りはその筆頭に据えられるべきものであろう。

弓祭りはまだ暗いうちから始まる。冬の夜川に浸って身を清めるのである。そして神社に向かった射手たちは凜々しい裃姿になって射場に臨む。

三度弓、神頭（じんとう）、雁股の儀礼の矢が放たれる。呪文を唱えて放たれた神頭の矢は幾百年を経たと思われる樹木の中へと消え、雁股の矢はつがえて左右左と振ったまま放たずにそのまま納めてしまう。続いて千八筋の矢が放たれ終わるころには山陰は祭りの庭を薄暗くしてしまっている。そしてナマヤ、割り膝、投げ出しの古式射法があり、最後に毘沙門の的を射て弓の神事は終わる。

弓祭りはこうしたほかに村を二分して集落ごとに射手を選んだり、それも長男に限るといった定めもあり、古来からの仕来たりを残している。

桃原も夜須の百手も一日から二日がかりで千八筋を射放つのであるが、それは黙々として退屈さえ感じる。しかし、北川の弓祭りは一日中人波は絶えることなく、喚声がこだまする。それは、千八筋の賑々しさにある。この矢音の行く先には十センチほどの人形的がある。矢筋を追って人々は首を一斉にまわす。それがはずれると落胆の溜め息となり、命中すれば喚声があがる。

千八筋には懸賞がかけられていて、命中した射手にはその都度に毛布、反物などが渡される。この渡し方がまた賑しく、射手の家族を射場の中へと引き出し組み合い、もつれあうようにして渡すのである。争奪といった感じで、その様子にまた人々は笑い興じるのである。緊張のあとの笑い。それが一日中続く。これが単調になりがちな弓の神事を賑々しいものにしている。この懸賞という余興がなければもの淋しいものであったことは想像に難くない。

もしかすれば、現今の過疎の荒波に消失してしまっていたかも知れない。技と祭りとを楽しむことに創意工夫した古い昔の里人たちに、今こそ喝采（かっさい）を送るべきであろう。

（高知県立高知工業高等学校教諭）

ほんの一昔は〔5〕

# 西森秀夫翁聞書

坂本正夫

わしは明治四二（一九〇九）年に高岡郡長者村宮ケ坪（現、仁淀村）の農家に生まれた。わしは長男でなかったので、家を継いで百姓をすることができないので職人になろうと思うて、一五歳のときに別府村戸立（現、仁淀村）の佃益弘という桶屋へ弟子入りした。ここで三年弟子奉公をし、それから六〇年余り桶作り職人として生活してきたが、このあたりの人は桶作り職人のことをタルヤと呼んでいる。

昔は飯鉢、手洗い桶、料理鉢、風呂桶、水運び桶、味噌桶、漬物桶、酒樽、蒸し桶など穀物、液体などの容器はすべて桶、樽だったのでタルヤの仕事が多く、年中仕事が絶えることがなかった。しかし、江戸時代にはこの地方に職人がいなかったので、村から願いを出して伊予（愛媛県）、芸州（広島県）、長州（山口県）などの島（瀬戸内海）の職人を雇い入れていたと聞いている。それで今でも「大工は長州、タルヤは大三島（愛媛県）」ということばが残っている。

桶の材料は木材と竹だが、木材は一般に杉を使い味噌桶、漬物桶にはガヤ、水桶、肥料桶などには槙という木が喜ばれた。農家はこれらの木材を三尺（約一メートル）ぐらいの長さに切って保存していたが、タルヤが自分で調達することもあった。

西森翁と仕事場

桶作りの仕事は木割りから始まるが、酒桶（樽）、味噌桶、漬物桶などは塩分がしみ出すのを防止するためイタメ（板目）、その他はマサメ（柾目）に割って使う。割った材をカンナで削ってシゴ（きれいに削った板）を作り、これを組み立てて底を入れるとでき上がる。輪には竹ヒゴを使い、普通の桶にはハチク、大きな桶にはシチクという竹を使う。料理鉢の輪には針金を使う。なお、「竹の八月木の九月」という俚諺が教えているように、竹は旧暦八月に切り取ったものが良い。

正月から春のシツケ（農作物の植付け）前までと秋の取り入れから冬にかけては各農家を回って仕事をしたが、そんなときには仕事を依頼された家で泊まっていた。こんなにして回ったのは長者村の他に吾川郡池川町、高岡郡では大桐村（現、越知町）、別府村、東津野村、伊予の西谷村（現、愛媛県上浮穴郡柳谷村）などであった。

百姓の仕事が忙しい晩春から秋口にかけては自分の家で仕事をしていたが、そのときには主に飯鉢、料理鉢などを作った。注文生産のこともあるし、自分の見当で作ったこともあったが、一番売れたときには一年に八〇個作った。

昔は鉢、桶などがよく売れて仕事がいくらでもあったが、近ごろはプラスチック、ビニール、金属製品などが出来て仕事はひとつもなくなった。まことに世の中も変わったものじゃあ。（一九九〇年一二月聞き書き）

（高知県立小津高等学校教諭）



生き続ける自由民権⑤

# 「植木枝盛先生誕生地」の碑

外崎光広

国立大学のほか私立大学の一部も参加した入試センター試験（新テスト）が今年一月十二、十三日に全国三百五十一の会場で実施された。その「日本史」の問題に植木枝盛が登場した。その要点を引用しよう。

「自由民権運動を支えた政治思想の一つは、自由・平等は人が生まれながらにしてもっている基本的権利であるという考えであった。植木枝盛の『東洋大日本国国憲按（案）』は、このような思想を最も徹底させた憲法草案の一つである。」と述べた上で、「①天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス ②天皇ハ国ノ元首ニシテ統治権ヲ総攬シ此ノ憲法ノ条規ニ依リ之ヲ行フ ③帝国議会ハ貴族院衆議院ノ両院ヲ以テ成立ス ④政府官吏圧制ヲ為ストキハ日本人民ハ之ヲ排斥スルヲ得」の四項を挙げ、このうちのどれが植木枝盛の「東洋大日本国国憲按（案）」の条文かと質問している。正答は④であり、これが有名な植木草案の人民の抵抗権条項である。

新テストのこの設問は「生き続ける自由民権」を実証した好例である。

四十五万人を越える志願者であり、そのうち、日本史選択者数は十三万余であった。将来の日本を担うこれほど多数の若人が必死にこれに取り組んだことの意義は絶大である。

なお設問の条項は第七一条一項であり、第二項は「政府威力ヲ以テ擅恣暴虐ヲ逞フスルトキハ日本人民ハ兵器ヲ以テ之ニ抗スルコトヲ得」である。この前後にも抵抗権に関する「第七十条□政府国憲ニ違背スルトキハ日本人民ハ之ニ従ハサルコトヲ得」「第七十二条□政府恣ニ国憲ニ背キ擅ニ人民ノ自由権利ヲ残害シ建国の旨趣ヲ妨クルトキハ日本国民ハ之ヲ覆滅シテ新政府ヲ建設スルコトヲ得」があり、その目指す内容はより明快である。高知市文化振興事業団発行『土佐自由民権資料集』にはその全文二百二十条を収録している。

今日高知市中須賀町二三七の二に「植木枝盛先生誕生地」の碑が立っている。これは一九五七（昭和三十二）年の「植木枝盛生誕百年祭」（主催、植木枝盛生誕百年祭実行委員会・高知市立中央公民館・高知新聞社・NHK高知放送局・ラジオ高知）事業の一つとして同年九月二十二日の除幕である。

このほかの事業は植木枝盛遺品展（三月二十八—三十一日高知県立図書館）・植木枝盛先生を偲ぶ座談会（高知県立図書館）・講演、井上清「土佐の自由民権運動」外崎光広「植木枝盛と婦人解放運動」（高知市中央公民館）、遺跡めぐり（三月三十日）であり、協賛出版が外崎光広『植木枝盛家族制度論集』、森下菅根『無天雑録』、家永三郎『植木枝盛日記続』であった。

この記念事業は市民を対象にした画期的な企画であり、一九七四（昭和四九）年には「立志社創立百年記念事業」（同実行委員会主催）が開催され、記念展覧会（四月六日—十四日）、記念講演会（四月十日）家永三郎「立志社憲法草案の歴史的意義」司馬遼太郎「思想の土壌」、記念出版『片岡健吉日記』（高知市民図書館）がその内容であり、一九八一（昭和五十六）年には「自由民権百年記念事業」（同実行委員会主催）が開催され、自由民権百年記念展（八月二十一日—九月六日）、記念講演会（十月三日、RKCホール）遠山茂樹「自由民権運動の歴史的意義」安岡章太郎「民権と国権」、自由民権百年記念小中高校生作文募集、記念出版、記念碑の建立と修理、民権史跡巡りなどであった。

植木枝盛を目玉に据えたこれらの事業が高知市立自由民権記念館の基礎であり、同館を一巡した受験生はさきの新テストに完全に答えただろう。

（松山大学教授）

# 私の旅

荒谷深雪

節分を過ぎたとはいえ、この高知もまだまだ寒い日がある。そんな時、私は踊ることで硬くなった体をほぐす。あったまるというより、体が熱くなり、ストレスも解消される。

私が踊りと出会ったのは八歳の頃、父の仕事の関係で、中国の北京から少し北へ行った所である。

兵隊さんの慰問に行くとのことで、近所の親や子ども達が集まって音頭や芝居を習い、トラックを半円に並べ、そのライトに照らされた仮設舞台の中で踊った。兵隊さん達の楽しそうな顔と声援、その時の感激が忘れられずいまだに毎日踊り続けている。

引揚げる時、母が怪我をして弟を背負うことが出来ず、八歳の私が三歳の弟を背負い、父のベルトの後にぶら下がって帰国したこと、貧しい中、やりとげたい一念で、食べる物を削ってもお稽古を続けさせてもらったことを、つい昨日のように思い出す。

高知市民の祭り「よさこい鳴子踊り」に参加する中で、ちょうど良い波に乗ってニース・ロスアンゼルス・西安等、国外に踊りに行く機会に恵まれた。

さらに近年では、一九八八年のドイツ、八九年のフランス、九〇年のスコットランドと、日本の祭りをヨーロッパの人々に知ってもらい、相互の友好を深める『ジャパン・ウイーク』にも参加させていただいている。

各県から色々の出し物が出ているが、土佐の鳴子踊りは、手に持つ鳴子が一つの楽器としてリズムがとれる、どんな曲にも乗れる、覚えやすい、等の点で特に喜ばれるようだ。

ヨーロッパの祭りは、十一～十二月にかかるため、北緯五三度の地では、コンサートホールやオペラハウス等での舞台形式となる。そこで演出も、ヨサコイ節や古典の鳴子踊りを元に、龍馬と刺客のからみで始め、最後はその国の国旗をアレンジした法被での踊りをフィナーレにと工夫をこらす。一方、素人ばかりの団員も、少ない日数の稽古で新しい振りを覚えるのに苦労する。でも、そうした苦労の甲斐あって、日本の着物・刀を持った侍・鼓と太鼓・笛と詩吟で踊った『龍馬』は大いに人気を博した。

しかし、何といっても『鳴子踊り』は街頭でのパレードが一番。

一九七三年、七四年のニースカーニバル。いくら南フランスのコートダジュールであっても二月だ。それでもみんな寒さを忘れて踊った。観客と一体になり「ホイ、ホイ」と掛け声をかけると「ハイ、ハイ」と聞こえるらしく「ハイ、ハイ」と踊りながらついて来る。係の人が何度も整理する。紙吹雪を散らす。終わった時には汗でくっつき、体中紙吹雪にまみれ、道路は一面三センチぐらい積もった花の道であった。

八九年のフランスは暖かい年にいきあい、パレードができ、人々と交流の場がもてた。右手にリヨン湾を見ながら左手には人、人の海岸通り、周りのホテルやオフィスの中から顔を出して手を振ってくれる人、人。そんな時の気持ちは踊ったものでなければわからないだろう。良し悪しがその時すぐはね返ってくる。それは舞台に立つものや踊っているものにとっての大きな魅力である。

高知の観光、鳴子踊りの今後を思う時、確かに時代の流れにマッチすることも考えなくてはならないが、外国（よそ）の真似のままではわざわざ高知へ来てもらいにくくなるのではと少し心配する。

この年まで多くの人と出会いがあったが、先輩からはその良い所を、友人とは共に飲み語り、若い人からは若さをと今後さらに一つ一つ重ねていきたい。明日は誰とどこで逢えるかと期待し、いつか市民の祭りにおばあちゃん（私）と息子、娘、孫と共に踊れる日を夢見ながら、人生の旅を続けて行こう。（舞踊家）

高知を撮る　**昭和8年頃の久万新橋附近**　村岡　昭三

# 古い新聞

畳をあげたとき、タンスを移動したとき、下敷きに使った古い新聞紙が出てきて、つい読み耽ってしまうことがある。どこがそんなに面白いかと聞かれても困るが、日々の新聞をこれほど面白く読んだことはないので、古い新聞が面白いのには、それなりの理由があるのだろう。

先日も、千葉県に住む次男の寺の畳干しをしたとき、もう十年ほども前の新聞が出てきて、しばらく作業をおあずけにして、それを読んだことであった。

昭和五十四年八月二十日付けのその新聞によると、占領期の外交文書がこの度公開されたことや、丁度夏の甲子園野球の最中で、前日の準々決勝第二試合で、高知高校が池田高校に5対1で負けたことなど、いろいろ出ていた。高知高校の記事やそのほか二、三のものには興味をひかれたが、あとはとりたてていう程のものではない。なのにやっぱり熱心に読んでしまっている。

人間とは、おかしなものである。何がそんなに面白いのか。

野球好きの友人は、「多忙で暇がない」を口癖にしているだけに、事実随分と忙しい目をしているのだが、贔屓のチームのナイターは、始めから終いまで熱心に見てしまう。したがってその内容は十分に熟知しているにもかかわらず、もう一度深夜のテレビニュースで、ナイターの結果を聞かなくては、納得して床につけない。飽かずにそのスポーツニュースを見て、満足を噛み締めながら寝床にはいる。

翌朝は翌朝で、新聞を開くと真先に昨夜のナイターの記事を読む。それもチラッと見るといったものではなく、念入りに読んでいく。彼だけではない。スポーツファンにはこういう人がほかにもいる。人間の興味とは一筋縄ではいかないものらしい。

ものを読むのに最もらしい理由をつけるのは、本当は不用なことではなかろうか。人を読書に誘うのは、昔もいまも、面白さが第一である。その面白さには理屈はいらない。（寸）

## 俳誌「波」

### 五百号を越えて

大西　瓶子

昭和二十二年、浜田波川先生が高知市で創刊した「波」が平成二年八月で五百号を越えた。

波川主宰は共同通信社高知支局長の傍ら自ら編集に携わっていたが、昭和二十六年東京本社へ転任に伴い発行所を大宮市に移して現在に至っている。

主宰は高浜虚子を師系として花鳥諷詠の純粋な俳句をめざして「季語現象を詠む」ことを提唱して指導に当たっており、会員は東京、大宮、名古屋を中心に約半数、あとの半数は県内在住者で占めている。

月刊、A5判で年二回同人による作品の特集号を編み、頒価は月六五〇円である。

昨年十月に五百号を記念して高知大会を三翠園で開き（九十四名参加）、また十一月には東京中野のサンプラザで東京大会（九十名参加）を盛大に開催した。

郷土に深い関心を持つ主宰は、創刊当時からの根っ子会員や熱心な支援者達による集いを指導され、室戸、高知、土佐清水など十数の句会も盛んで、個人を尊重しつつ会の特徴を活かした指導が師との絆を深いものとしている。

五百号の近詠に望郷の次の句がある。

夕立やふるさとは今日志那弥さま　波川

また伊野の蓮照寺には四百号記念に建立した〈常に澄む水の伊野町紙を漉く〉の句碑がある。

連絡先　高知市本町二ノ三ノ二〇
入交産業㈱内　沢田たかほ
電　話　〇八八―二二―二一四一

## 俳誌「蝶」

### 土佐の風土に立って

たむらちせい

俳誌「蝶」は、蝶の会と「海嶺同人句会」の二つの会が合同して発刊しています。

土佐は海と山の変化に富んだ地形です。植物は亜熱帯から亜寒帯にかけて豊かだし、鳥獣虫魚もたくさんいます。このように恵まれた自然風土や、そこに住む人々の生活（くらし）、それらを詠ずることによって、日本の美しさや日本人の心性をも表現したい、と「蝶の会」は考えています。そしてそれを詠むには、俳句の伝統的句法である有季文語定型を重んじます。

一方「海嶺」では、土佐を鬼国と見ます。鬼国に棲む者の反骨精神、その精神に立って各人の詩風土に、デーモンに満ちた鬼国性を領有することを願います。そしてその表現のためには、無季現代語定型工作等、現代俳句が獲得した句法を果敢に導入すると共に、想像力の翼を大きく拡げます。

この相反する二つの会が合同した俳誌ですから、当初は矛盾し相殺する怖れがありましたが、号を追う毎にその危惧は解消し、むしろ二つの方法が誌上でクロスオーバーすることによって相乗効果をあげています。

なお、初心者には、たむらちせいや森武司による懇切な指導があります。隔月刊で会費は年額四千八百円（送料共）です。

発行所　高岡郡佐川町入寺山
たむらちせい方
電　話　〇八八九―二二―四〇七八

## 季刊詩誌「舟」

### 詩は、芸術・文化の核

西　一知

季刊詩誌「舟」は一九七五年、東京・新宿で創刊された。戦後三〇年、戦後詩の爛熟がいわれるなかで、「舟」はもう一度明治以来の自由詩のオーソドキシーを見直し、真の詩のあり方を探究しようと志す全国気鋭の詩人の同人誌として発足した。同人は六二号現在で六五名。メンバーには札幌現代音楽展リーダー木村雅信、新潟現代詩人会々長経田佑介、東京で最も活発なグループ板橋詩人会々長広井三郎、伊那文学会リーダー中原忍冬、

徳島県詩人の中心的存在扶川茂、また、現代ドイツ、フランス、アメリカのビート詩人たちと密接な交流をもつ同人たちもいる。

同人誌は同人相互の作品研鑽機関という狭いグループ意識を破り、〝詩はあらゆる芸術、文化の核である〟という開かれた意識で、他の芸術ジャンル、文化活動と取り組んでいる同人も多い。先輩、後輩、性別、地域差など、ここでは問題とされない。

昨年六月、「舟」は創刊以来の編集・発行人西の帰高で拠点を高知へ移したが、自由民権運動発祥の地こそ「舟」にふさわしいと、全国の同人、読者は変わらず継続している。期待に応えたい。

（「舟」頒価七〇〇円、〒二一〇円、年間購読料〒共三〇〇〇円）

発行所　高知市神田六六〇―一
西方　レアリテの会
電　話　〇八八―三三―二〇四一
振　替　東京七―九九二五

## 機関誌「建依別」

### 相互の親睦モットーに

水田菜穂子

この三月、通算四八三号を迎えた機関誌「建依別」の歴史は古く、大正十五年にまで溯る。この年「海南警察時報」として創刊。その後昭和十一年に「警友」、二十一年に「警友土佐」、二十二年に「珊瑚」と改称。その間第二次大戦等で休刊もあったが、昭和二十四年一月から現在の「建依別」に定まり、今日に至っている。

編集は、十八名からなる「編集委員会」を三か月に一度開催し、主な編集方針を決め、職員相互の親睦をモットーに「読まれる機関誌」「見（魅）せる機関誌」を目指している。

単に娯楽・交流本に終わることなく、〝組織の活性化を図り資質の向上に寄与する使命〟もあると自負し、硬軟とり混ぜた記事を掲載するよう努めている。初任科生からOB、警察官、女性、家族と読者層も広いので、各層に親しまれる記事を盛り込むよう心掛けている。また毎号、特集テーマを設けて取材に出向き、時には部外者の講演やインタビュー記事を掲載し、好評を得ている。

これまで、文化施設の紹介や、史跡・名所の紹介、県展入賞者、職員文化展出品者の作品を紹介するなど、「人間的ゆとりと創造のすすめ」のキャンペーンを行ってきたが、これからも体験記の連載や部外の専門分野で活躍されている方々の紹介などを通じて〝魅力ある自分づくり〟を提唱して行きたい。

発　行　高知県警察本部教養課
電　話　〇八八八―二三―一二一一

高知市高須、土電バス・ＪＲ四国バスの「介良通り」バス停前にある「御大師井戸」。「南無大師遍照金剛　御大師井戸　弘法の恵も深き清水かな」と彫り込まれた石の下からは、いつも水が流れ出ている。すぐ横に「―― 弘法大師の念力によって湧き出た霊水として古くから人馬の飲料のみならず諸病、特に眼病にも効能ありと伝えられ云々」と昭和62年９月吉日建碑の由来が記されている。

## 風伯

### 専門館の実現を

半年ばかり前、職場へ、どんな資料でもいいが甘しょの資料はないだろうかと尋ねて来た人がいた。鹿児島の年輩の人だった。

日本中のサツマイモの資料を集めて鹿児島に甘しょ図書館をつくりたいと話し始めた。甘しょは中国から薩摩に入り、カライモと言われ、サツマイモとなって幕末から全国に拡がった。作りやすく、太平洋戦争期から戦後にかけては、このサツマイモのおかげで日本人は生きのびることができた。

それが忘れられ資料もなくなってきている。全国各地での作り方、品種、食べ方、それらを集めて民俗学もカバーする甘しょ図書館を、甘しょのルーツである指宿市に建てる計画である。なるほど、そういう、全国どこにもない図書館、資料館のつくり方もあるのかとその人の発想に眼をみはった。

早速、手近の資料をあげ、あとから県立農事試験場の戦前、戦後の甘しょ研究報告などをコピーして送った。

甘しょ図書館ではないが、図書館も、いま各分野別、個別のものができていい時代になってきている。文学、農業など散逸している資料も多い。寄贈も含めて組織的収集も早い方がいい。文学館、農業館その他固有の専門図書館ができるとき、高知はさすがに文化県、文化都市ということになるのではあるまいか。さしづめ実現可能な高知文学館をとの声もあちこちできく。

（睦）

## アンサンブル金沢

# モルダウ・カルテット

平成3年5月7日㈫　開場6時　開演6時30分
県民文化ホール〈グリーン〉入場料／二千円（全席自由）

主催／高知市文化振興事業団・朝日新聞社

「オーケストラ・アンサンブル金沢」は一九八八年十一月に石川県や金沢市が主体となって設立した、わが国で初のプロの室内管弦楽団です。音楽監督に岩城宏之氏、常任指揮者に天沼裕子氏を迎えるなど、意欲に満ちた若い楽団です。

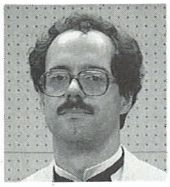
今回はそのメンバーのうち、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの弦楽四重奏団として来高します。ぜひこの機会に小人数編成の室内楽の美しい音色をお楽しみ下さい。

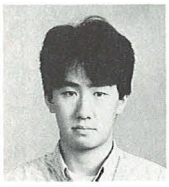
〈演奏曲目〉
ハイドン／セレナード
モーツァルト／
アイネ・クライネ・ナハトムジーク
シューベルト／カルテザーク
ドヴォルザーク／アメリカ

※チケットは3月7日より左記にて発売。
チケットセゾン
チケットワープ
高知大丸
高新プレイガイド
県民文化ホール
高知市文化振興事業団

●ヴァイオリン　パヴェル・ボガチュ

●ヴァイオリン　ウラディミール・ブカチュ


●チェロ　ルドビット・カンタ


●ヴィオラ　石黒靖典

## 高知の文化を考える

■新刊■

高知の文化を考える会 編
A5判・188ページ
定価1,200円
（本体1,165円）

文化と生活のかかわりをとらえなおし、文化活動や文化施設の在り方をはじめ、市民主体の文化を具体的にどう発展させていくかを、市民的立場で考える。

## 高知県文学散歩

岡林清水著　近刊

四六判・280ページ
定価1,800円（本体1,748円・税52円）

文学にしるされた土佐の地や、ゆかりの碑をたずねる文学散歩。文学史をもたどるこの旅は味わい深く、また高知県の文学的な豊饒さが発見でき、楽しくかつ有意義な書となっている。

〈内容〉
1. 甲浦・室戸路
2. 土佐日記の旅
3. 高知市とその近効
4. 土讃線とその周辺
5. 土佐くろしお鉄道に乗りて
6. 椿の岬への旅

その他に資料として、県内の芭蕉句碑総覧と文学展開表を掲載。

財団法人 高知市文化振興事業団　〒780 高知市本町5丁目2番3号　TEL(0888)73－4365
郵便振替 徳島 8-14869